

論文審査の結果の要旨

平成 30 年 2 月 22 日

申請者：黄 文瀾

論文題目：日本語の多義語の習得研究 ―基本動詞「とる」の場合―

本研究は多義語「とる」の習得研究であり、認知言語学的な意味論と第二言語習得研究の両方に関わる意欲的な研究である。「とる」は、言うまでもなく基本動詞の一つであり、意味が広範囲にわたっている。それゆえ、重要な動詞である一方、語義の習得が困難である。ところが、執筆者によると、このような動詞が教室で体系的に取り上げられることは稀であり、新出語義が散発的に追加されるだけである。では基本的な多義語の習得を支援する指導法はあるのかという大きな問いが執筆者の議論の背景にある。

本研究は、形式的には、先行研究の批判的検討を経て独自の仮説を提示し、それを検証するという形を取っている。独自の仮説は、第一の研究課題である「とる」の意味分析である。基礎となるのはプロトタイプ理論とラネカーによるプロトタイプとスキーマによる意味拡張の理論である。しかし、執筆者が十分に検討したのは国広や松田、森山といった日本語の意味研究である。そしてコーパスのデータに基づいて、プロトタイプから周辺的な意味へと拡張する意味構造として独自の分析を提示した。細部に疑問がないわけではないものの、先行研究が主に機能語の習得研究であり、意味構造は辞書の記述に基づいていることを考えると、この試みは評価すべきである。

そして、第二の研究課題は「とる」の理解面習得の横断的研究と縦断的研究、第三の研究課題は産出面の横断的研究と縦断的研究である。これらは第一の研究課題に基づいて行われた。ここでも先行研究に着実にあたって、L1 と L2 の関係と多義語習得について重要な文献の要旨をまとめている。

本研究で最も興味深いのは、中国で日本語を専攻する大学生を対象とした調査研究である。対象者は 1 年生から 3 年生までの 373 名とし、理解面の習得では翻訳テスト法を実施し、一部の学生にプロトコル分析を行った。また、産出面の習得を、いわゆる「穴埋めテスト」によって調査した。いずれも調査方法は適切であり、その結果の統計的な分析も確実なものとなっている。

これらの調査研究の結果、プロトタイプの意味から周辺的な意味へと習得が広がるのではなく、学習者の第一言語、習得ストラテジー、百科事典的知識、環境要因としてのインプットとアウトプットという要因が習得に関与していることが明らかにされた。これはプロトタイプ理論に基づく習得よりはむしろ、使用基盤モデルによる言語習得を支持する結果となり、これまでの研究に再考を促す結果が得られたことも評価できる。今後

「とる」の意味構造の新たな見解や、話者の持つ中間言語の意味構造の解明にも資すると考えられる。また、それが多義語の指導法の研究と開発につながることも期待される。

平成 30 年 2 月 14 日(水)、東金キャンパスで実施した口述試験では、論文の概要を、論点を整理しつつ明快に述べることができた。質疑応答では、翻訳テストの出題基準と問題文の並べ方、先行研究の検討における問題点、学習者独自の意味拡張の有無、意味拡張の具体例、語彙習得支援への示唆と習得研究に対する貢献は何か、などが質問され、いずれも適切な答が得られた。

以上から、本論文は合格と認められる。

主査：人文科学研究科 吉田 明彦

副査：人文科学研究科 岡崎 眸

副査：人文科学研究科 野々口 ちとせ

副査：大連理工大学 杜 鳳剛